

現代性の環境

情報科学芸術大学院大学 [IAMAS] の学生有志による芸術実践を中心に紹介する展覧会

会期 2026.03.07-04.12

(前半: 3月7日(土)～3月23日(月)、後半: 3月27(金)～4月12日(日))

出展 前半: florian gadenne + miki okubo、吉本梓、大橋美月、

テクノロジーの〈解釈学〉メンバー有志(石井飛鳥、片倉洗一、高玄燁)

後半: 兒島朋笑、河合将也、中岡孝太、中村駿、ふじかおる

企画担当 大久保美紀

主催 情報科学芸術大学院大学 [IAMAS]

協力 art-sensibilisation

会場 The Terminal KYOTO (〒600-8445 京都市下京区新町通仏光寺下ル岩戸山町424番地)

関連イベント

「現代性の環境」をめぐるディスカッション

日時 3月28日(土) 14:00-16:00

会場 The Terminal KYOTO 2F

登壇 秋庭史典(名古屋大学)、三輪眞弘(IAMAS 名誉教授・京都芸術大学)、

吉岡洋(京都芸術大学)、大久保美紀(IAMAS)

Website : <https://www.iamas.ac.jp/gendai/>

お問合せ先 : 大久保美紀 / mk_(@)iamas.ac.jp



展覧会概要

「現代性の環境」は、科学的知性と芸術的感性の融合を建学の理念に、メディア表現の先駆的研究を行う情報科学芸術大学院大学 [IAMAS] の学生有志による芸術実践を中心に紹介する展覧会です。現代社会を生きる私たち、とりわけ若い世代が直面する切実かつ避けがたい問いに、メディア表現を探究する多様な視座から向き合います。

高度に発達したメディア環境は、利便性や効率性をもたらす一方、価値観や感覚の同質化を加速させ、個々の知覚や思考のあり方に強い圧力を及ぼしています。こうした状況において、芸術的実践は、その同質化に抗する批判性や、別様のリアリティを構想する力を獲得しうるのでしょうか。リアリティを揺るがす技術的条件、人工知能に象徴される知覚や判断の再編成、身体とテクノロジーの関係性の変容——それらを前に、メディアを介した創作はいかにあるべきかという問いが、あらためて浮上しています。さらに、エコロジーの問題は、自然環境のみならず、主体・社会・人工物・テクノロジーを含む存在論的な射程へと拡張されつつあります。惑星規模のオイコノミアのなかで、芸術表現は、環境とともに生きる思考の枠組みをいかに問い返すことができるのでしょうか。

「現代性の環境」は、私たち自身の実践によって問い直され、更新され続けます。本展は、その環境に対して、芸術がどのように関与しうるのかを、現在進行形の問いとして提示します。

出展作家 作品解説

●河合将也 KAWAI Masaya

愛知県・渥美半島出身。IAMAS22 期生。IAMAS では自転車を媒介に、人間とテクノロジーの関係性を批判的に捉える作品を制作。現在は、物理的なチェーンをもつ自転車から、不可視のチェーンであるブロックチェーンへと領域を移し、表現活動を行う。

《自転車生命体 Cycloborg》（2024）は母なる自転車と人間が共生するサイボーグの創造を通じて、高度テクノロジー社会で求められる新しい倫理観や技術観を探究するプロジェクトとして構想された。ペダリングと呼吸を強制的に同期させる RespiCycle System によって、私たちの生命維持は自転車に委ねられ、移動環境でスピルリナを培養する TeraCycle System によって、食糧や水分の摂取すら外部化される。映像では自転車に従属した人間の葛藤が描かれるが、その過程で自転車という技術的な存在との関係は移り変わっていく。テクノロジーの過剰について描く本作は、テクノロジーとのハイブリッドという今日の私たちの生き様そのものについて、私たちに再考を促す。

参考：作者のブログ記事「さようなら、自転車生命体 Cycloborg」（クリティカル・サイクリング）、『ポワゾンルージュ vol.6』（2026, pp.59-74）にも本作に関するエッセイがある。



●兒島朋笑 KOJIMA Tomoe

2001 年富山県生まれ。IAMAS 23 期生。社会システムがもたらした人間同士の出会いの喪失を背景に、1990 年代に展開されたリレーショナル・アートの視座を継承しつつ、現代における「関係性のアート」の新たな可能性を模索する。

《できるだけ合わせず、なるべくすれ違おう》（2025-）は、現代の SNS 環境において常態化している比較や承認を基盤としたコミュニケーションが、ある種の同質化社会を形作っていることを批判的に考察するリレーショナル・アート作品である。今日の生活の中で私たちの価値観は画一化され、異質な他者との出会いの機会は失われている。作品を構成する複数のスピーカーは共棲する異種の生きもののように配置され、同質化社会について議論する声がざわめく。私たちはそこで、多様な他者の声に耳を傾け、また自らも誰かの思考をゆさぶるような「庭」の体験に誘われる。

●中岡孝太 NAKAOKA Kota

滋賀県生まれ。大阪市立大学商学部卒。ソニー・コンピュータエンタテインメント、テレビマンユニオン、中京テレビ放送などを経て、情報科学芸術大学院大学 [IAMAS] へ進学。生成 AI 時代に通用しうるドキュメンタリーの映像表現と、その方法論を探究している。

《one day ///tokyo (neo/x)》（2025）は、作者がかつて生活していた“東京”の断片的な記憶を、AI との協働によって呼び起こす短編ドキュメンタリーである。映像の独特な質感は、生成 AI による映像をモニターに映し出し、それを手持ちカメラで撮影することで得られたものである。仕事仲間との再会、酔ってなくしたメガネ、花火大会の中止、会ったことがある気がするサラリーマンの姿……、記憶をたどりながらさまざまな場所を再訪する。現実と虚構が交錯し、確からしかった記憶はゆらぎ始め、AI との協働は、私たち自身の物語の不安定さに向き合うことを促す。本作は、AI 時代のセルフドキュメンタリーのあり方を探究した問題作である。

●中村駿 NAKAMURA Shun

2001年金沢市生まれ。光学装置と色材を用いて、イメージとモノの間に生まれるおかしみを探求している。写真が現実の痕跡であるという信頼が失われた現代において、メディアを通して／通さずに見ることの差異から、視覚の現在性を問い直す。視覚芸術作家、デザイナー。

《物のイメージ》（2025）デジタル画像処理の質がいちじるしく発展し、さらには画像生成AIの技術が台頭した今日、私たちが日々目にするさまざまな物のイメージは、その信憑性を失っている。かつて、写真はありのままの現実を写し出すと信じられていた時代があった。しかし、今日のメディア環境を生きる私たちはそのようなナイーブさを持ち続けることはできない。では、私たちが物体の生々しさ、その存在感を強く意識する契機はあるのだろうか。作者はそこで、写真のように見えるが確かに実在している物の違和感を鑑賞者にもたらす。この経験は、写真が指し示しているものが不確かであるという私たちが日々置かれている状況を逆手にとることで、イメージの知覚に揺さぶりをかける挑戦である。

●ふじかおる FUJI Kaoru

IAMAS25期生。暮らしの傍らにある微細な感覚への関心から、観察を通して制作を行ってきた。IAMAS入学後は、生活空間を手入れする中で生じる感覚や判断に着目し、機能や効率に留まらない価値を、体験や表現を通して捉え直す方法を模索している。

作者は、暮らしの中の細やかな感覚に関心を持ち、観察や記録をもとに制作を行ってきた。《家の中の静かな管理》（2025）のきっかけとなったのは、リュックに物をしまうという一見とりとめもない行為への着目である。「収める（収納する）」という行為は、私たちの日常生活のなかで「気にかけていないでいい状態」を生み出してくれるものである。作品では、オブジェクトを実際に収める体験を通じて、「収める（収納する）」という行為の感覚やその過程での思考を振り返る。そのことを通じて、日々の生活のなかの感覚的な判断、さらには感性的なふるまいについての思考を促す。

※「収める」デモンストレーション「無用を収め続ける」を以下の日程で実演します。各回15分程度、参加無料。お気軽にお立ち寄りください。（下記以外の展示では、作家が収め続ける行為についての映像記録を上映します。）

3月27日（金）11:30～、16:00～

3月28日（土）13:30～、16:30～

4月11日（土）11:30～、16:00～

●吉本梓 YOSHIMOTO Azusa

IAMAS25期生。沖縄にて自生植物の利用や民具制作の調査を継続してきた。現在は、縄を縛うという身体的・反復的行為に着目し、植物との関係性から「自然とは何か」を問い直す芸術実践を行う。

《軌道上のイネ》（2025）

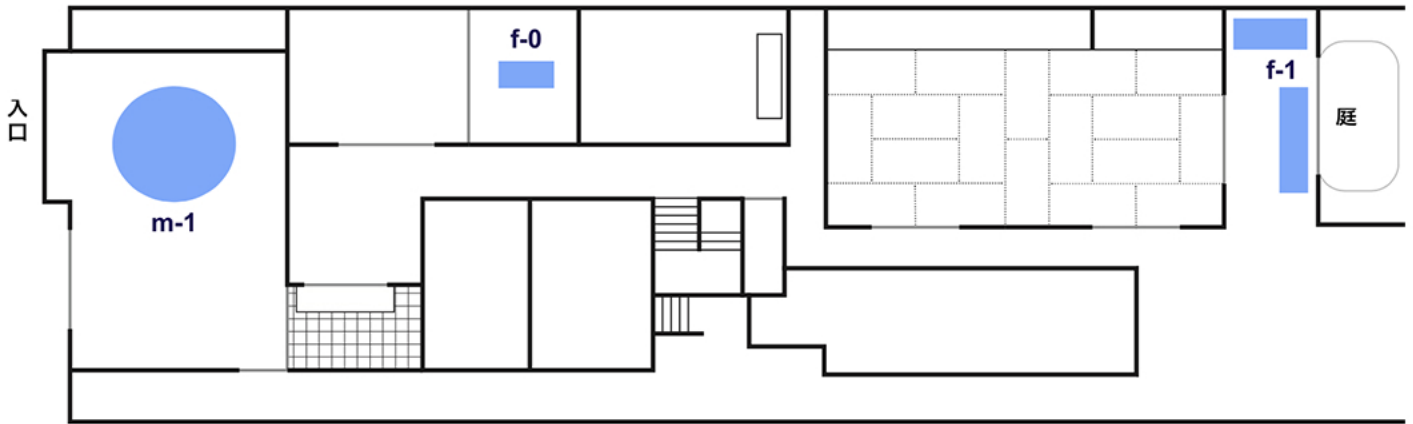
人類が農耕を始めたから、人は自然を支配し始めたのか、それとも植物に導かれ共に変化したのか。本作は一粒の稲からその関係を見つめ直す。日本では「一粒に七つの神が宿る」とされ、稲は精神文化とも深く結びついてきた。作品では、19世紀末から試みられてきた電気栽培技術を用い、微弱な電流や磁場が稲に作用する様子を可視化する。科学と信仰、自然と技術の境界が揺らぐなか、私たちが失いつつある“自然との対話”をもう一度感じ取るための試みである。

《月桃のしめ飾り》（2021-2025）

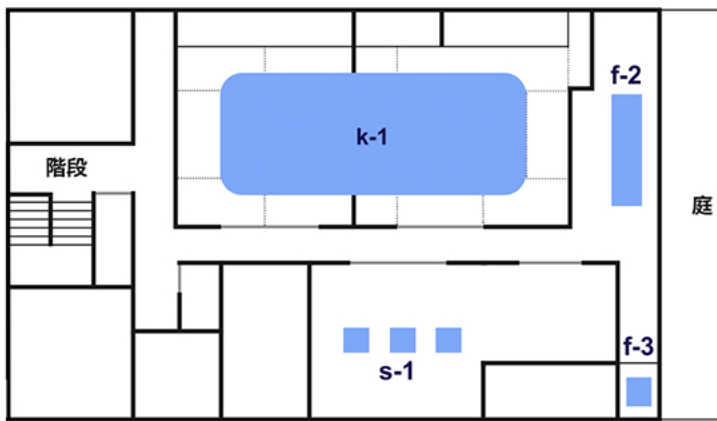
沖縄在住時より、沖縄の自生植物である月桃でしめ飾りを作ってきた。正月に年神を迎え入れる神聖な場所（結界）を表す。しめ飾りは毎年一種制作されてきた。本展ではそのうちのいくつかを展示する。

会場図 作品リスト

1F



2F



河合将也

m-1 《自転車生命体 Cycloborg》(2024)

自転車、W170 × D45 × H135 cm、映像 4分30秒

兒島朋笑

k-1 《できるだけ合わせず、なるべくすれ違う》(2025-)

インスタレーション、可変

中村駿

s-1 《物のイメージ》(2025)

軟質塩化ビニル樹脂・顔料、可変

ふじかおる

f-0 《無用を収め続ける》(2026) 無用のモノ、デモのイメージ映像 34分31秒、ループ

f-1 《家の中の静かな管理》「さしこむ」「あわせる」「つめる」(2025) PLA

f-2 《家の中の静かな管理》「まとめる」「ならべる」(2025) アクリル・木・ペンキ

f-3 《家の中の静かな管理》「おさめる」(2025) 石・紙・木・生活用品

中岡孝太

n-1 《one day ///tokyo (neo/x)》(2025) 12分42秒、シングルチャンネル

吉本梓

y-1 《軌道上のイネ》(2025)、イネ科植物・水槽・川の水・スズメッキ銅線・LED・霧発生機、H100 × W100 × D200 cm

※《月桃のしめ飾り》の展示が会場内に2点あります、見つけてみてください。



B1

